
ライフ（株）

シラベ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライフ（株）

【Nコード】

N1534T

【作者名】

シラベ

【あらすじ】

ごく普通に暮らしていた高校生の朽葉 翔くちは しょうそしてその友達の江津 力えつ ちから。二人は自分達の家族に段々と違和感を覚えていく。面白半分で探偵ごっこを始める二人が真実を見つげるとき、それはたしかな形となって二人の前に現れる……。

とまあ、こんな感じですよ。今回は携帯小説っぽく書いてみようと思います。読んだことないんですけどね

違和感（前書き）

第1部 違和感 です。

違和感

目覚まし時計が甲高い音を鳴らす。

いつも通り、この時計は俺が起きる5分前に鳴る。

小さい頃からの習慣。

6時起床。7時朝ごはん。7時半、家族各々出勤、登校。

偶然なのか、小学校から高校まで、登校時間は同じだった。

そのせいもあってか、中学に入る頃には、目覚ましが無くても6時より少し前に起きることができるようになっていた。

制服のボタンにかけていた手を止め、目覚まし時計の頭を軽く叩く。

急に静まり返る部屋に、母親の声だけが響いてきた。

「翔一、朝ごはん作るの手伝ってくれるー？」

「はいはい、今行きますよ、っと。」

ボタンを全て止め終わり、ベッドに置かれたブレザーを掴んで1階へ降りる。

「今日はなにすればいい？」

「じゃあ……、とりあえず目玉焼きとウィンナー焼いてくれる？」

「りょーかーい」

6時に起きてもご飯まで特にすることもなく、初めて朝食の手伝いをした小学校3年生以来、朝食のおかずを作るのは、俺の仕事になっていた。

しばらくして、良い焼き目のついたウィンナーと半熟に焼けた目玉焼きが、フライパンに出来上がった。

3人分の皿にそれぞれを平等に分け、それをダイニングテーブルまで運ぶ。

ここまでが、俺の仕事。

時計を見ると、長針は6時10分を指していた。

ご飯が炊けるのは、毎日決まって6時半。

しばらくの間暇になるこの時間、俺はこの時間を、丁度始まるニュースの占いを見て過ごす。

しかし今日は占いはやっていなかった。

画面の上部には、白い文字で控えめに、『緊急速報』と書かれている。

30代後半くらいの女のニュースキャスターが、横から伸びてきた手から紙を受け取り、その内容を伝え始める。

『昨夜、今年卒業の東京大学の学生が、両親を殺害する事件がありました。事件は、昨夜の10時頃に起きたとみられ、警察は近隣の住民に聞き込み調査をしている最中のおつです。また、新しい情報が入り次第、お伝えします。では、次は今日のわんこ特集で』

一応最後までニュースを聞いてみたものの、結局占いは中止のようだった。

チャンネルを他に変えてみても、たいして興味を引くものは無かった。

ソファでくつろいでいると、炊飯器からリズムのいい曲が流れ始めた。

時計の長針は、20分を指している。

「母さん、今日は早めに設定したんだ？」

「ええ、今日に行く所があつてね。」

「こんな朝早くに？」

それ以上、母さんは何も言わなかった。

父さんが起きてきて、3人で朝食を食べた後、部屋に上がり登校の準備をする。

家を出てから、数百メートルくらい歩いた所で後ろから声をかけられる。

これも毎朝のこと。習慣。

「よお、翔。」

「おお、おはよう。」
軽い挨拶を済ませ、歩くスピードを緩めて声の主に並ぶようにする。

「なあ、力。お前の母さん、今日は行くところがあるって言うてなかったか？」

「さあなー、聞いてはないけど。なんでだ？」

「いや、俺んこの母さんがそうだったから、力のところもそうかなー、と思っで。」

「ふうん……。まあ、いつも一緒ってわけじゃないだろ。」

「まあ、ね。」

こいつは江津しづつ力りき

小さい頃からの友達。こいつとは家族ぐるみの付き合い、というか親達の方が仲が良くくらいだ。

だから、久々に出かける俺の母さんは、力の母さんと一緒なのかと思っただけど……

もしかしたら父さんの方とか……。

と、考えてからそれは無いとすぐにその考えを捨てる。

「どうした、翔？」

「ううん、なんでもないよ。違うならいいんだ、別に大したことじゃなかったし。早く学校に行こう。遅刻だけは嫌だしな。」

話しを変え、実際に遅れそうだった学校への道を急いだ。

違和感（後書き）

ありがとうございました。
第一部 違和感 でした。

日常の中で（前書き）

結構時間あいたけど、続きですッ

第2部 日常の中で です。

日常の中で

一限目の数学。

教壇に立つ先生は、落ち着いた風に公式の説明をしている。

黒板に書いてあることを半ば機械的にノートに写す。

窓の外を眺めながら、今日の朝あったことを思い出す。

母さんが出かけるのは別におかしい事ではない。ただ、なぜか
気になった。

「おい、なによそ見してるんだ。まあいい。千葉、25ペー

ジの問1番、2分やるから解いて黒板に書け。」

授業中によそ見はするもんじゃないな……。

その日の昼休み、いつも通り力と一緒に弁当を食べていた。

「お前どうしたんだよ？ 先生に怒られるの見たの初めてだぞ。」

「ああ、ちよつと考え事してたんだ。気にしなくていいよ。」

力に心配をかけてしまったことを少し反省しながら、昼休みは過
ぎていった。

「ただいまー、っと。」

家の玄関で靴を脱いでいると、リビングから母さんの声が聞こえ
た。

『 ええ、はい。 もう高校生になりまして……。 ええ、も
うすぐです。 はい、では。 』

誰かと電話しているようだけど、それにしても少し暗い感じがす
る。 話していた内容は俺のことだろう。

リビングに入り、台所にいた母さんに何気なく聞いた。

「誰と電話してたの？」

「し、翔！ お、おかえり……。 えっと、友達と電話してたの
よ。 それより、帰ったらまずは「ただいま」でしょ？」

「ああ、うん。ごめん、ただいま……。」

2度目の「おかえり」を背で聞きながら、自分の部屋に上がる。扉を閉め、靴を床に放つてからベッドに倒れ込んだ。

「さっきの母さん、かなり動揺してたよな……。」

ただ電話の内容を聞いただけで。

俺に聞かれるとまずい内容の電話だったのだろうか。

そう思うと、なぜか寂しい気がした。自分が遠ざけられているような、そんな感じ。

ただ自分が心配性なだけなんだろうけど、やっぱりこういうのは嫌だ。

後でもう一度電話の内容を聞いてみようかと思いついて、今は襲ってくる睡魔に身を委ねることにした。

時計を見ると既に時間は10時を回っていた。

予想以上に長く寝てしまっていたようだ。

それにしても、母さんは俺を起こしてくれなかったのだろうか？

それとも起こしてくれたけど、俺が起きなかっただけ？

どっちにしても、もう皆ご飯を食べ終わっているだろう。

一階に降りると、母さんも父さんもどこかに出かけているのか、どの部屋も電気は点いていなかった。

テーブルには逆さまの茶碗と豚カツとキャベツの千切りを見つけた。茶碗の横には書置き。

「温めて食べておいてね。母さんたちは出かけてきます。か…

…。朝も出かけておいて夜もか……。」

「はあ……っ。」

強めのため息をつきソファに深く座る。

ポケットに入れていた携帯を何気なく開いた。

『新着メール：1件 江津力』

力からのメールだ。俺が寝ている間に来ていたらしい。

『あんまり無理はするなよ。今日は早く休め（p | .（）
生真面目というか、律儀というか……』

基本は良い奴なんだけど、なぜか友達が少ない損な奴。

だけどころいう気遣いは嬉しい。今日は早めに寝ることにした。

日常の中で（後書き）

第2部 日常の中で 終わりです。

ありがとうございました

嵐の前の

目を少し開けるとカーテンの隙間から漏れる光が、顔に降り注いでくる。

眩しさに、一度開けた目をもう一度閉じた。

あれから母さん達は帰って来ているだろうか。そんなことを何気なく思いながら、上半身を起こす。

まだ完全には目が覚めていない。

ぼーっとした意識の中で時計のアラーム機能をOFFにする。

もはや習慣になっっている行動だ。

「翔ー！ 起きてるー?!」

俺の何気ない疑問は晴れたようだ。

寝間着から制服に着替え、1階に降りる。

いつもの俺の仕事である 習慣である、朝食の手伝いを始める。

色々と指示をしてくる母さんの言葉を生返事で答えながら、フライパンを握る。

「どうしたの？ 寝不足？」

「え？ ああ、うん。 ちょっと考え事してて、寝るの少し遅くなっちゃったんだ。」

「そう……、気をつけなさいよ。」

「うん……。」と、それも生返事で返す。

なんだか今日も授業中によそ見をしそうだ。

6時半になり、炊飯器から軽快なメロディーが流れる。ご飯が炊けた合図だ。

母さんがご飯をテーブルに運んでくるまでの間に見ていたテレビでは、また暗いニュースが流れていた。

『 』のようです。 次のニュースです。昨日に続き、大学生に

よる殺人事件です。昨夜、自宅にいた大学生の　　　　　さんは、
両親である　　　さん、　　　さんを殺害した後、警察に自ら出頭し
ました。昨日に続いての大学生による両親殺害事件、この事件に
関連性はあるのでしょうか？　専門家の　　　　　さんに聞いてみま
しょう。　　　さん、この事件では　　　　　」
専門家であるという中年のおじさんは、少し慌てた様子でキャス
ターの言葉を聞いている。この後自分が喋ることも考えている
のだろうか。

「チャンネルを変えてくれる？　朝からこんな暗いニュースばか
りじゃ気が滅入るわ。」
いつの間にか俺の横に立っていた母さんは、複雑な顔でテレビを
見つめていた。

怪訝に思いつつも、母さんの言うことももつとどだ。　ただでさ
え最近調子が悪いのだ。　そんな時に朝から暗いニュースは気分が
沈む。

朝食を食べているとき、ふと昨日ことを思い出した。

「ねえ母さん、昨日の電話んだけど結局誰と話して　　　」

「あ、そうだお父さん、廊下の電球が切れてたのよ。後で直して
おいてくれない？」

食べ終わりの挨拶を終え、二階に上がる。

さっきの母さん、明らかに俺の言葉を遮った。

そんなに誰と話していたのか言いたくないのか……？

とりあえず、このことは後で考えるところとして学校の準備を始めた。

力が迎^{リキ}えに来るまではしばらく自室で暇をつぶす。　それも、習
慣。

そんなことを考えていると、つい苦笑してしまう。

自分は習慣だらけの人間なのだろうか。　決まり事に塗り固めら
れた、つまらない人間なのか。

そんな詩人めいたことは言わないし、思わないけど。
それでもやつぱり、自分を褒めることは出来ない訳で、つまりその結果が『苦笑』なんだ。

習慣ばかりで、新しいことを始めようとしない自分はやつぱりつまらないんだと思う。　周りから見ても、自分で自分を見てみても。

一人になるとこんな自問自答の繰り返し。　好きでやってるわけじゃない。　勝手に考えちゃうんだ。　それが幸か不幸か、どちらにしる時間が潰せるのは嬉しいことだ。

家のチャイムが鳴るのとほぼ同時に俺の名前を呼ぶ人がいた。
俺を心配してか、力が今日は家まで迎えに来てくれたようだ。

「よつ、元気になったか？」

玄関の扉を開けると、笑顔の力が早々に心配をしてくれる。

「うん、少し身体が重いけどなんとか。　ありがと。」
それを俺も笑顔で返す。

通学中、二日立て続けに起きた事件のことを思い出した。

「そういえばまた起きたな、大学生が親を殺す。つて事件。」

「ああー、あつたな、そんな事件。　あれの所為で朝からテンションダダ下がりだったぜ……。」

あからさまに顔をしかめて言う力に、これ以上この話しをする気はおきなかった。

学校に着き、教科書を机に入れる。　鞆を机の横に掛け、手を伸ばして机に突っ伏した。

やつぱり疲れが取れていないようだ、身体すごくダルい。

夕ご飯前に少し仮眠を取った所為もあったし、なによりなぜか母さんの言動が気になってなかなか寝付くことができなかった。

電話で俺についての何を話していたのか、そしてそれを聞かれたときに必要以上に慌てたあの態度……。　やつぱり何か隠しているのか……？

そう思ってから、今日二度目の苦笑をした。
ありえない。

昔からこうだ。少しでも日常と違うことがあると見境なく疑ってしまふ。

いわゆる疑心暗鬼状態。

母さんにだつて色々付き合いはあるし、その中でたまたま俺の、つまり息子の話しが出たとしてもなんら不思議ではない。

それを寝不足になる程疑つて、考えて、悩んで、そんなことに喜一憂してしまふ自分が恥ずかしい。

もうこんなことを考えるのはよそう。

そう思い、重くなつた身体を起こし隣の席の友達と談笑を始めた

嵐の前の（後書き）

書くときと書くときで間隔が空くと、どうしても登場人物の性格と
かを忘れちゃいますね。

違和感があれば指摘していただきたいです。（図々しいですねw

第3部 嵐の前の 終わりですー

ライフ 株式会社（前書き）

あえて題名をここでサブタイにもってくるという……w
本当はこういうのって最後の章に持ってきた方がいいのかなあ、と
も思いつつやっぱり自分の好きに書きたいなど、思い切って持つて
きました。

第4部 ライフ 株式会社 ですッ

ライフ 株式会社

2時限が終わり次の教科の準備を終えた時だった。廊下をドタドタとつるさく走る音がした。

高校生にもなつて簡単なモラル、マナー、ルールが守れない奴が多すぎる。

ただでさえ今日は体調が優れないのだ。こんなくだらないことで気を害したくはなかった。

でもそれを、音を出している本人に言う勇気もない。

自己嫌悪というか、情けない自分の性格にため息をつく。こんなことをしているから力に心配を^{リキ}かけてしまふんだらうな……。

「おい！ 千葉はいるか!？」

扉をこれまたつるさく乱暴に開けた先生が声を上げた。

いくら急いでいても生徒の見本となるのが先生なんじゃ……
そこで俺の思考は途切れた。

先生の一言によって。

「お婆さんが倒れたつて、お前の母親から連絡が入った！」

病院に来るのは何回目だろうか。

基本的にあまり怪我や病気をしない我が家は、あまり病院にお世話になることが無かった。

久々に来た病院。こんな理由で来たくは無かつたんだけどな……。

俺が病院に着いた頃には、すでに婆ちゃんは亡くなっていた。

安らかな眠り、という表現がぴったりと当てはまる様な、そんな寝顔だった。

口を軽く緩め、目もどことなく柔らかかった。

爺ちゃんの話したと、最後まで苦しそうな顔はしなかったそうだ。ずっと元気で、疲れ知らずだった婆ちゃん。家に行くといつも

笑顔で迎えてくれた。

今までのことを思い出すと、自然と涙が溢れてきた。
今まで流したことなかった涙だ。

悔し涙でも、うれし涙でも、子供の頃の泣きじゃくる涙でも、どれでもなかった。

ただただ悲しくて、それが現実なんだと受け入れてしまう自分が怖くて、だけど現実から目を背けることなんかできなくて……。

目を閉じると小さなころからの思い出が鮮明に映る。
そしてまた涙が溢れてくる。その繰り返し。

父さんも母さんも泣いていなかった。

子供の前で涙を流したくないのだろう。ずっと俺の傍にいて、慰めてくれていた。

時間が経つにつれ、皆が落ち着きを取り戻したのはそれから30分程してからだった。

このまま学校に返すわけにもいかないだろう、ということでは俺は一旦家に帰された。

自室に入り、ベッドに倒れ込む。

気が付くと涙がじわっと滲んでくる。枕が目の周りだけ濡れていた。

昨日のようにこのまま寝ることは出来なかった。

うつ伏せから仰向けに寝返りを打ち、天井を見上げる。

人生は突然のことばかりだ、と聞いたことがある。

本当にそうだと思った。

こんなこと予想もしていなかった。

家族が、そんな……、欠けるなんて、考えたくなかった。

小さな時間の中で、大きすぎる出来事が起きると人はパニックになる。動揺する。

だけど、今の俺は意外と冷静だった。

たしかに、先生からあの一言を聞かされた時は頭が真っ白になったけど。

でも今は自分でも驚く程冷静だった。
こうして無駄に時間は過ぎて行く。

『今日は出前でも取って食べておいて、お母さん達は忙しいから
帰れそうにないから。』

時計の長針が7を指した頃だった。 母さんから電話がかかって
きた。

それに小さく返事をして電話を切る。

また自分の部屋に戻り、ベッドに座る。

何かを口に入れる気にはならなかった。

今はただ、静かな場所で静かにしていきたい。

今日はちゃんと寝られるだろうか。 ふとそんな疑問が生まれた。

杞憂で終わればいいけど、今は寝られる気がしない。

簡単に言うけど今は何かをする気にならないんだな、と思うと少し
可笑しくなった。

身体が疲れている。 今はとにかく身体を休ませようと、身体を

倒し目を閉じた。

そしていつの間にか眠りにについている。

実際、俺が寝られたのはそれから2時間程してからだった。

時計を見ると3時を回った所だった。

ベッドから出て身体を伸ばす。 足だけをベッドからはみ出させ
るといふ変な恰好で寝たせいか、中途半端な時間に起きてしまった
ようだ。

ぐう というお腹の音に肩をすくめ、食べるものを探しに一階へ
降りようとした。

部屋の扉を開けたとき、玄関の方から話し声が聞こえた。

「ええ、ですが……。」

「ご安心ください、今回のようにご家族やご親戚が亡くなられて

も十分な？補償 が付きます。 それに もう何年も前にご覚悟されたと記憶していますが……？」

「……はい、その通りです。 わかりました。 ではそのようにします……。」

「ご安心ください。 ニュースのようにはなりません。 むしろあっちの方が特殊な例なのですから。 9割以上の方は幸せになつておられます。」

「はい……。」
か細い母さんの返事を最後に、母さんと話していた誰かは家を出た。

保険会社の人だろうか？ 婆ちゃんが保険に入っていたというのは少し意外だけど、さすがに70歳を超えれば一般的にはおかしくないのだろう。

でも、『ニュースのように』というのはなんのことだろう。 保険会社に関する大きなニュースは最近見えていないはずだけど……。 なんにしても、今は寝起きプラス空腹のせいでまともに思考できない。 このことを考えるのは何かお腹に詰めてからにしよう。

一階に降りると母さんがテーブルに肘を付き、考え事をするようにうなだれていた。

「どうかした？」
さっきの会話の声を聞いていてもわかった。 今の母さんは元気が無い。

当然のことだ。 婆ちゃんが……、居なくなつて、家に帰つてくるまでずっと色々なことをしていたのだろう。

「翔……！ ……起きてたの？」
何かを期待するような口ぶりだ。 『今起きたところ』とでも言うて欲しいのだろうか。 でも実際今起きたところなのだから、嘘をつく必要もない。

「ううん、今起きたところだよ。」
だからこう答えた。

その言葉を聞くと、母さんは安心したようにため息をついた。俺はそれ以上何も言わず、冷蔵庫を探る。

さっきの保険会社の人のことを聞こうかとも思ったけど、今の母さんは少しでも休ませてあげたかった。

「疲れてるならもう寝たら？」

俺は興味ではなく心配の言葉を口にした。それに小さく返事をした母さんは、自分の寝室へとゆっくり歩いて行った。

俺もお魚ソーセージを食べ終わったら部屋に戻ろう。思わず出ってしまったあくびになぜ可笑しくなり、少し安心した。少しは自分の中の気分は晴れたようだ。

明日は今まで通り心から力リキとの会話を楽しめるだろうか。そうできることを願いながら俺はベッドの上で目を閉じた。

朝、いつも通り目が覚める。

いつものように着替え、いつものように朝食の準備を手伝った。いつもと違ったのは、少しだけ心が軽くなっていたことと朝から家を訪ねる人がいたことだけ。

ピンポンというお馴染みのチャイムを聞き、俺が玄関に出た。扉を開けて入ってきたのは20代くらいの若い男だった。スーツを着こなす？できるサラリーマン みたいな人だった。

その男の人は俺の顔を見ると、冷たい笑いを浮かべたように見えた。でもそれは一瞬のうちに営業スマイルへと変わっていた。

「どうも、初めまして。人々の生活を応援する、『ライフ 株式会社』の佐藤と言う者です。お母様はいらっしゃいますか？」
うん、第一印象は悪くない。

ライフ 株式会社（後書き）

急展開すぎワロタwwwとか言わないでくださいね
なにか読み手様を驚かせるような展開が書きたいものですね……w

はい、第4部 ライフ 株式会社 終了です。

段々と物語も進んできます。

これからもっと面白くなるように頑張っていこうと思います！
読んで頂いた方、ありがとうございます。

物語はまだ続きます。

探偵ごっこ(前書き)

少し時間空いちゃいましたが、5部です。

第5章 探偵ごっこです。 と、言いたいですが。 バカ丸出しでしたね。 章ではなく部に変えました。
改めて、第5部 探偵ごっこ です。

追加完了しました。 下からスクロールバー2個分くらい上からです。

探偵ごっこ

『ライフ株式会社』という聞いたことのない保険会社が家に来てから、少し母さんの様子がおかしい。具体的には？、と聞かれるとうまく答えられないけど、俺と話するときの母さんは少し、演技がかってるように見えた。

あの日、佐藤と名乗った会社の社員は俺が家を出る時間になっても母さんと話しをしていた。

その日の放課後のことだった、帰宅途中の道中 力が口を開いた。

「なあ、『ライフ』っていう名前の企業知ってるか？」

「え？ お前、どこでその名前聞いたんだよ？」

「知ってるのか、『ライフ』のこと。」

少し驚いたけど、よく考えればそこまでおかしい話じゃない。力がとある保険会社の名前を知っていても不思議ではないから。力の話しを聞くと、今日の朝突然家に来たということだった。つまり、俺と同じだ。

それを言うときさすがに力も驚いていたけど、その話はそこで終わった。

まだ俺が調子を取り戻していないと思った力は、最近毎日俺に気を使ってくれた。

少しでも明るくしようとしているのだろう、俺に積極的に色々な話題を振ってきてくれる。

力自身も少し困惑しているのか、途中で話しを終わらせすぐに新しい話題に移行してしまうことが多かったけど。

今もそのせいか、力は先日発売されたゲームの話を始めてしまった。

なんだか、逆に俺が力に気を使っている今の状況が少し楽しかった。

楽しくて、うれしかった。空回りしてしまう程俺に気を使って

くれる友達がいるということが。

「でも、少し慌てすぎじゃないか？」

力に見えないように苦笑しながら、ぼつりと呟いた。

それから毎日、力はずつとこんな感じだった。俺が何度「もう大丈夫だから。」と言っても変わらない。心配してくれるのはありがたいんだけどな……。

俺は本当にもう大丈夫だ。　婆ちゃんとの別れの辛さはもう引きずっていない。

それを説明しようとしても、力はすぐに別の話題を切り出す。

何度も言うように、心配してくれてるのは嬉しい。

でも、

少しだけ、本当に少しだけ、

疲れる、と思ってしまうた自分がいた。

朝、いつものように力と一緒に学校へ向かっている時のことだった。

力に元気が無いことに気が付いた。

最近のように口を開かない。いつもならずつと声が聞こえてくるくらい喋っているのに、今日は元気がない。

朝はあまり口数の多くない俺は、それについて力に聞くことはなかった。

しばらくの無言の中、口を開いたのは力だった。

「なあ、翔。」

俺の名前を呼ぶその声はいつもの張りのある声ではなかった。

「ん？」

「『ライフ』っていう保険会社のこと、この前話してたよな？」

「ああ、俺の家にも来てたやつか。それがどうかしたか？」

「最近、そこの社員がよく母さんとどっか行ってるみたいなんだよ……。」

最初に浮かんだ考えは、浮気。

でもその考えは次の力の言葉で消された。

「浮気、とかじゃないんだよ。その社員、女の人だしな。」

「あ、ああ。そうなのか、一瞬まさかと思った。」

笑い混じりで話す俺に対して力はいつもの以上に真剣だった。

「だから、俺だつてあんまり詮索したくは無いんだ。でも、ほぼ毎日だぞ？ 聞いたことも無いような会社の社員と、女とはいえ毎日一緒にどこかに行ってるんだ。そして帰ってくる度に元気が無くなっている。しかも俺達に優しいんだ、いつも以上に！」

話している途中から興奮し始めた力を落ち着かせ、近くの公園に移動した。

ブランコの傍にあるベンチに二人で腰掛ける。

「で、お前はどうしたいんだよ？ 自分の母さんが何してるのかわりたいのか？ それとも詮索はしたくないのか？」

「ああ、だからそれについては昨日の夜考えたんだ。」

「で？ どうする？」

「その女を尾行してみる。」

「はあ!？」

思わず大きな声が出てしまい、近くを歩いていた人に奇異の目を向けられてしまった。

立ちあがって軽く会釈をし、再びベンチに座る。

さつきよりも少し小声で力に問い詰めた。

「尾行つて、お前探偵ごっこでもするつもりかよ？ もしバレたらどうする？ 下手したら警察に捕まったりするかもしれないんだぞ？」

「じゃあお前は気にならないのか？ 『ライフ』のこと。」

気になる。

正直すっげえ気になるんだ、『ライフ 株式会社』

最近色々あったせいでもあまり深く考えたことはなかったけど、よく考えればおかしいかもしれない。

普通、朝から保険会社が家を訪ねるか？ いや、そういうことも

あるのかもしれないけど、でもあんまり無いだろう。

ましてや家に上げる程本格的な話なんかあるか？

婆ちゃんのことについてなら、俺が偶然聞いてしまった深夜のあの時だけで足りるんじゃないか？ おそらくあの深夜の時の話しかも『ライフ』の社員との話しだっただろうし……。

俺は保険会社についてなんか詳しく知らないけど、力の言葉を聞くとなんでも怪しく感じてしまった。

それに力の母さんと毎日出かけている……。

力には悪いけど、俺は少しワクワクしていた。

小さい頃は、火遊びや空き家探検みたいなわゆる、「あぶない遊び」をよくやっていた。高校生に入ってからはもちろんそんなことは出来なかった訳で……

つまり、久しぶりの「危険感」に子供のように心躍っていた。

だから、

「わかった、俺も付き合う。」

当然こういう結論に至る。

「何言ってるんだ、俺一人で行く。今のお前は色々あって頭もよく働かないだろ、足手まといにしかならない。」

これも、俺を氣遣っての言葉、だよな？

それでも、腹が立った。

「は？ そんな言い方ないだろ。それに俺は何度も「もう大丈夫」って

夫」って

「いいんだよ、お前は来なくても大丈夫だ。俺一人で出来る。」

そういうことじゃない、来なくていいとか、そうじゃなくて……！ たしかに面白半分っていう理由もあるけど、それだけじゃなくて！

「そうじゃない！俺の話しを聞け」

「だから、いいって言ってるだろ？ お前の言ったように危ない

んだ、警察沙汰になるかもしれないしな。だからお前は

いい加減に……、

「俺の話しを聞いてくれよ！」

しろ。

もうつんざりだ……、

何度言っても、何度言っても聞かない。 気遣いと自己中は違っ

んだよ……！

「な、何また大声出してんだよ？」

「もう大丈夫だって俺が何度言った！？ お前が言ってることが危険だなんて知ってる、少なくともそれがわかるくらいには回復してる！」

力の顔は、本当になんで俺がこんなに怒っているのかわからない、というような顔だった。 その顔がすぐに申し訳なさそうな顔に変わる。

「悪い……、大きなお世話だったってことだよな、悪かった……。」

「

え？

「でもやっぱり俺の個人的な好奇心にお前は巻き込めない、何かわかったら連絡はするからよ、待っててくれ。」

そんなこと俺がいつ言った？

聞こえるはずも無い俺の心の声を無視するように、力は立ち上がると一人で学校とは逆の道へ向かった。

それを黙って見送ることしかできなかった自分は、まだ大丈夫じゃないかもしれない。

世界史の先生の雑談が始まった。

雑談が始まった途端にほとんどの生徒が教科書をしまい始める。

俺は元々教科書を出していなかったから、さっきまで同様、肘を付き窓から校庭を見下ろす。

斜め前の席は空いている。

今頃例の女の人を尾行しているのだろうか。 見つかって無ければいいけど……。 まさか、通行人に怪しまれて警察を呼ばれてるか……？

こんなことばかり考えていたせいで、この授業の内容はまったく頭に入ってこなかった。

校庭を見下ろしながら授業時間が過ぎるのを待っていると、教室の後ろの扉が音をたてて開いた。

「ちつす、すんません、遅れました。」
軽い挨拶と共に入ってきたのは力だった。

「どうしたんだよ、？探偵ごっこするんじゃないのか？」
昼休憩、力の席の隣に行き軽い皮肉をぶつける。

「いや、その……な。『ライフ』の社員が家に来る時間とか、わかんねえし……。だからその……。」
思わず笑ってしまった。吹いた途端に力の眉間にしわが寄り、「笑うなよ！」と突っ掛つてきたけど、それでも笑いが止まらなかった。

力は『ライフ』の社員が今日来ることを知っていて、それで今日尾行をしようとしていたのだと思っていたけど、どうやらそれは俺の勘違いだったらしい。

「お前、勢いだけで『尾行してみる』なんて言ったのか？ いつ来るかも知らないで？」

「あ……ああ……、そつだよ！悪いか！？」

「悪くないよ、ただ……、くっ……くっ……っ」
「っ！！」

それからしばらくは俺が笑って力が声を張り上げる、という無限ループが完成していた。

「はあ……はあ、とにかく、まずは社員が来る日時を知らないと
な。」

笑い疲れた俺が言葉を投げる。

「ああ、そつだな。」

力は俺とは反対の方向を向きながら答える。 　　まだ少しいじけているのだろう。

「じゃあ、日時がわかったら知らせる。」

「え？ 俺は連れて行かないんじゃないの？ なかったのか？」

「うるせえ、やるんだろ、？ 探偵ごっこ。」

「ははっ、ああ。」

面白くなりそうだ。

探偵ごっこ(後書き)

ありがとうございました。

次回はついに潜入です……(ドキドキ

M i s s i o n 1 下準備(前書き)

ここからサブタイがしばらく「Mission」になることをお知らせします。

第6部 M i s s i o n 1 下準備 です。

Mission 1 下準備

物事には段階があると思うんだ。

そしてその一番初めが「発案」、かな？

「よし、くをしよう！」とか、「くがしてみたいな。」から始まる。

そしてそれをする為になにが必要かを考え、集める。それが準備。

大事だよな、準備。準備もせずに何かをしようなんて、先走りすぎて見てられないよな。

気持ちだけあっても何もできないんだ。ましてや、準備をしてないのに「行ってくる」なんて言っつて、少ししてからすぐすごと帰ってくるなんて恥ずかしすぎる。

「な、力。」

「そろそろいいだろ……、それ以上心の傷を抉るな……。」
力がげんなりした様な顔でベッドに仰向けに倒れ込む。

今は力の家の力の部屋だ。今日は尾行の準備をする為にここに集まった。

昨日、つまりは力が盛大な遅刻をした日、力はなんの考えも無しに自分の家に向かったそうだ。

そして途中で気付く、「『ライフ』の社員と母はもう出かけているし、仮に出かけていなくても尾行してその後はどうするのか。」と。

尾行する理由は一つ。『ライフ 株式会社』の正体を暴く。どうやって？

これも、「……それも考えてなかった。」らしい。

ただ尾行することしか考えていなかったらしい。

まあだから、つい先ほど俺がゆっくりと言っつてやった皮肉に、力は今ベッドに倒れ込んですねているのだ。あの力が。あの力が

この短期間で2度もすねた。子供みたいに。

そしてさらなる追撃。

「お前さ、最近キャラ崩壊してきてるよな。」

「るせえ。」

短く返事をしたその声にもいつもの張りはなかった。

このままからかい続けるのもいいかとも思ってたけど、今日はその為に集まったんじゃない。まあ、集まるって言うほどの人数じゃないんだけどね……。

「で、準備って何すんだよ？」

力が顔を少し傾けて聞いてきた。

何も考えずに集まるうなんて言っただんじやない。

役に立ちそうな物に心当たりがあったのだ。

「これだ。使えそうじゃないか？」

小さめのナツプサックから取り出した物を力に見せる。

「へえ、トランシーバーってやつか？」

「使えるだろ？」

「こんなもので手に入れたんだよ、まさか買ったのか？」

俺からそれを受け取った力は興味津々といった風で眺めている。

これは家にあった物だ。昔、というか今もだけど、父さんの趣

味が『サバイバルゲーム』なのだ。だから父さんの部屋を探せば

こういった物は山ほど出てきた。

明らかに「これエアガンの重さじゃないだろ……」と思う程重い

エアガンもあつたけど、それはあくまでエアガンだと自分に言い聞

かせたりもしてたけど……。 「手触りも絶対金属っぽいし……」

とか思ってもあくまでエアガンだと。

見なかった物以外を力に説明した後、「そういうことなら俺も使

えそうなやつ、あるぞ。」と言って一階に降りて行った。

それにしても……、楽しい。

よく、本番より準備の方が面白い。なんて言うけど、それは本当に上手い事言っただもんだと思う。 今回の場合は本番イコール尾行

なんだから、緊張感は当然持たないといけないけど、そうじゃなくてもやっぱり準備の方が楽しいんじゃないかな？

本番の、その時が訪れるのをドキドキしながら待つ。そしてその時までにはできるだけの準備と心構えをする。そんなことをするのが楽しいんだな、と思う。

現に今、俺がそうなんだから。

窓の外に見える電柱の上部。何気ないそんな日常の風景をぼーっとして見るのが好きだ。

今もそうしている内に力が帰ってきた。

ドアを開けて入って来た力の手には、箱が在った。

「なにそれ？」

「はっはっは、驚くなよ？」

自信ありげに箱を開ける。中を見るとそこにはシューズが入っていた。

ただの靴？ 特に変わった所は無い。白ベースに黒いラインが何本か入ったような、ありきたりな物だ。

そんな俺の考えを悟ったのか力が説明を始めた。

「こいつはな、簡単に言えば音を立てずに歩くことができる靴だ。まあ、メーカーもそんな目的で作ったんじゃないだろうから、偶然音を立てない靴ができちゃったんだろうけどさ。」

そこから長々とした説明を掻い摘んで言うと、地面と接する部分有特殊なゴムできていてほぼ素足と同じように歩けるらしい。

その為コンクリートなどでは少し『ペタペタ』という音がするそうだけど、それも気にならない程度だとか。

素直に感心する反面、変な物を持っているな、と可笑しくなった。でも、これでは『ライフ』の社員が来るのを待つだけだ。

第一目標。警察に捕まらない……。なぜかため息が漏れた……。

M i s s i o n 1 下準備（後書き）

ありがとうございました。

少し短いですが、これで終わりにします。

次回は第7部です。

Mission 2 リハーサル(前書き)

第7部 リハーサル です。

少しだけドキドキする展開にしようと思っってます。

頑張ります……。

ドキドキする展開にできませんでした。というよりしよつがありませんでした()()()

次次くらいにはできるかと…！

Mission 2 リハーサル

『おい！、そこじゃダメだ！ こつち来い！』

耳に付けたイヤホンから聞こえてくる声を聴き、路地裏へと続く細い道の方を見る。

隠れるように中腰で立っている力に、手で「ここで大丈夫」と伝える。

イヤホンから呟くように『まあ任せるか……。』と聴こえたのを確認し、歩道に視線を戻す。

何をしているのかと言うと、探偵よろしく尾行だ。

と言つても、本来の目的とは違う人間に

尾行している相手は同じクラスの女子だ。

これを提案したのは、力。

「とりあえず、リハーサルは大事だと思うんだ。だから、今度の日曜坂本を尾行する！」

と、自信満々に言われたのが木曜日。準備をしていた日だ。

当然、「坂本！？ 坂本綾か！？ アホか、もしバレたらどうなるか」と言おうとしたけど、

そこで俺の言葉を遮って言われた言葉で、不覚にも納得してしまった自分に今は腹が立つ。

「だから、良いんだよ。実際にライフの奴を尾行している時と同じくらいの緊張感が無いとリハーサルにならないだろ？ つーわけで、今度の日曜に坂本が来る。ピアノ塾の前に集合な。」

「なんでお前が坂本の通ってるピアノじゅく」

「いいか、本番だと思って行くぞ！」

あの時なんで俺の言葉を遮ったのかは聞かないことにした。

『坂本が来た。』

機械的な声で我に返る。

ピアノ塾の方を見ても坂本はいなかった。力の方に視線を向け

ると『もつと先だ、歩道の。』

言われた通り少しだけ目を凝らして見ると、小さくだけど坂本を見つけた。

今回の目的は坂本に気付かれない事。人当たりの良い坂本綾は、俺達を見つければきつと声をかけてくる。そうなたら今回の尾行は失敗。いや、まあ。俺はあんまり話したことは無いし、力が坂本と話していることもあまり見たことが無いから、実際に声をかけてくるかはわからない。

だからそこは賭けだろう。俺達には他に良い人選は出来なかったし。

正直俺はあんまり緊張とかはしていない。

仮に見つかって声をかけられたとしても、偶然を装えばいいだけの事。

力はそれをわかってているのか、わかっていないのか……。

でも、練習としてはいいんじゃないか、と思い俺も付き合っている。

『翔！ 後ろ！』

不意に聴こえてきた声におもわず「え？」と声を漏らす。

一瞬の間を置いて、それが力の声だと理解し後ろを振り向く。

「……！」

間一髪、後ろから迫って（せまって）来ていた車は俺の隠れていた電柱に激突した。

もしも少し反応が遅れていたら、俺は車と電柱に挟まれていただろう。

歩道に尻をつき安堵している俺に力が駆け寄ってくる。

「大丈夫か、怪我はないか？」

目の前の命の恩人の言葉が、今はいつもよりも頼もしく見えた。

「ああ。」と返し、力から手を借りて立ち上がるうとした。でも立ち上がれなかった。右足を地面に着こうとしたとき、激痛が走った。何かの拍子に骨折でもしたのか、見ると真っ赤に腫れている。

た。

「俺はなんとか大丈夫、でも悪い、尾行はもう無理だ。歩けそうもない。」

なんとか避けられたおかげで死にはしなかったものの、事故に係ってしまったことはたしかだ。警察とかに話しを聞かれたりするの……？

後々のめんどくさいことを考えながら車を見る。

すると自分の真横から声をかけられた。

「誰を尾行してたの？ てか大丈夫だった？ 轢かれかけてたけど。」

坂本の声だった……。

M i s s i o n 2 リハーサル(後書き)

ありがとうございました。

M i s s i o n 3 療養（前書き）

結構時間空いてしまいましたが、第8部です。

章分けは…、いらなかな…。

mission 3 療養

まさかこの短期間で病院に2度もお世話になるとは……。
とは言っても、この前の病院とは違う所だ。前の病院程大きい所ではない。

足の骨折はそこまで酷いものではなかったらしい。というか、
厳密には骨折ではなく単にヒビが入っただけみたいだ。

その後、力が救急車りきを呼んでくれ、今はこの病院で入院している。
やはり警察に話しを聞かれた。

でも、軽く事故当時の状況とかを聞かれただけで済んだ。ただ
問題なのが、運転手の方が重体で大変な状況らしい。

車の誤作動かなんなのか、エアバックが開かず、頭を諸にハンド
ルに打ちつけたらしい。

なんとというか……。被害者の方が加害者を心配するというのも、
矛盾というか……。変な感じた。

「やつほー、お見舞い来たよー。」
でもやつぱり一番の問題は、こいつだよ……。

「あれ？ 無視？ あんまり話したこと無かったとは言え、私女
の子だよ？ 女の子がお見舞いだよ？ 嬉しくない？」

坂本綾。

あの時俺が言った言葉の中の、『尾行』という言葉に異様に食い
ついてきたのだ。

俺が入院して以来、お見舞いと称して毎日ここに来る。

うん、たしかにな。可愛い女の子が毎日来てくれるというのは
嬉しい。正直超ラッキーだと思っている。

でも、来てから言う言葉の8割が『尾行』だと、さすがに辛いも
のがあるな……。

「ねえ、尾行って何なの？ だれを尾行していたのかくらいいい
じゃない。尾行とかすっごい良い響きだよね……。尾行……。は

あ……。」

そしてなぜかその言葉に頬を赤らめている。
なんかエロい。

「だから、ただの言葉の……その……、言葉のあやだよ。」

「あや？ 綾？ 私？」

疲れる……。」

とにかく、入院は2週間程らしいから、そこまで我慢すればこの地獄からも抜け出せる。

そして今度は本番だ。絶対に正体を見破る。ただの保険会社なのか、それとも何か別の組織なのか……。

次の日の夕方。放課後を向かえた力が来てくれた。

「よ、具合はどうだ？ 少しは良くなったか。」

「ああ、うん。もう軽く歩けるくらいにはなった。もしかしたら予定よりも早く退院できるかも」

「そいつは良かった。」

言いながら力はベッドの横のパイプ椅子に腰かける。

「はあ……。」

と、思うと肘を太ももに着いてうなだれた。

「どうした？ 体調でも悪いか？」

「いや、坂本がな……。」
なるほど……。」

俺だけではなく、力もか……。」

まあ、予想はしていた。だけどどんな理由であれ、坂本と話す機会が増えたのだから力は喜んでいるものだから思っていたけど、違ったのか？

いや、さすがに毎日ずっと聞かれ続ければ嫌にもなるか。好きな人相手でも。

「でもさ、坂本と話す機会増えたんだからうれしいだろ？」

でもそんなの関係ない。自分が意地悪だということを忘れる所だった。

案の定、それを聞いた瞬間力は慌て始めて、揚句には俺を殴ってきた。

うん、今日も楽しいぞ。

殴られることが、ではなく力と話すのが、な？

しばらく我慢すれば坂本も諦めるだろう。だからもう少し学校を休めるこの期間を楽しもうと思う。その後にはいよいよ本番が待っているのだから。

そのことを考えると緊張してくる。でも本来の目的を忘れちゃあいけない。元々これは『ライフ 株式会社』の正体を知ることが目的だ。それ以上のことはしないし、してはいけないとも思う。俺達高校生がそれ以上踏み込んではいけない気がした。だって、相手は大人の世界なんだ。どれだけ俺達が背伸びしようとする結局は子供。だからこそ今だって、『尾行』なんていうバカげた方法でしか自分の中の疑問を解決できないじゃないか。

今はこれで良い。良いんだ。高校生活をどう使おうが俺の勝手なんだ。俺の時間なんだ。

「この時俺達はこの後に待ち受ける現実を知る由も無かった。」なんていう展開はお話しの中のことだ。多分俺達は、拍子抜けするような事実を知って「なんだこんなことか」って言って笑うんだ。将来はこのことをもっと笑って話すんだ。そんなものだ。

そう、思いたい。

mission3 療養（後書き）

あ、坂本綾と翔が付き合う、なんて展開は無いです。
もちろん力とも。

恋の方面ではこれ以上進展はないのであしからず（笑）
翔と力もないですよ……？w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1534t/>

ライフ（株）

2011年10月9日00時12分発行